董炳月『魯迅形影』

Aihua CHEN (陳愛華 : Associate Professor, Chongqing University)

✉ aihuachen@cqu.edu.cn

(中国)重慶大学外国語学院副教授。2005年度広島大学博士論文「中島敦研究—内なる＜近代の超克＞—」で博士号を取得。日本近代文学における漢文脈の位置、戦時下の中日文化交流を主な研究課題としている。最近是中国国家哲学社会科学計画重大研究プロジェクト「近代以来の中日文学関係研究と文献整理(1870-2000)」の一環として《戦時下(1937-1945)の中日文学交流》を執筆中。近著は主に論文「＜脱中心化＞の裏側—中島敦による混血者の表象」(『東北亜外語研究』, 大連: 大連外国語大学, 2018)、「戦時下の日本における西遊記ブーム」(『日語学習与研究』, 北京: 對外經濟貿易大学, 2016)など。

LU Xun : Shape and Shadow by Bingyue DONG

In this book(LU Xun : Shape and Shadow by Bingyue DONG, Joint Publishing, September 2015), the meaning of “shape” is akin to Toramaru Ito’s idea of the “authentic Lu Xun”, while “shadow” represents the range of interpretations and understandings of Lu Xun, and the attempts to put Lu Xun’s thought into practice. The author pursues Lu Xun’s “shape” from various perspectives, using his relationship with Japan as an important starting point, and finds elements that may be a means of approaching the true “shape” from within the “shadow”. This book expands the field of Lu Xun research and provides much new information and many novel ideas to provide impetus for further work.

Keywords Lu Xun(魯迅), Shape(形), Shadow(影), Japan(日本)

『魯迅形影』(生活・読書・新知三聯書店、2015年12月)とは、なかなか面白い書名である。本書の「後記」によれば、「形」は「原形」または「本体」という意味で、魯迅の「形」というのは魯迅の「本体」を指し、伊藤虎丸の「原魯迅」の概念に近いものである。一方、「影」とは「魯迅に対する解釈と理解、魯迅の思想と精神を实践すること全般」を意味する。

この書名から、筆者は魯迅が仙台時代に用いたことのある「形影相弔わず(形不弔影)」という言葉を連想する。それはもともと異国の町に馴染まない青年の自嘲じみた言葉だが、もし魯迅のその言葉を、本書における「形影」の意味に置き換えて考えれば、我々が長い間持ってきた魯迅像という「影」と魯迅の本来の姿としての「形」との間にも、「形影相弔わず」のような一面があったのではないかと感じられる。竹内好などによって構築された「抵抗するアジア」を代表する魯迅像や、李平心が掲げた「最も英明で最も強毅な先駆者」たる魯迅像など、いずれも魯迅本来の「形」と大なり小なりの隔たりを持つものだったのではなからうか。魯迅本人曰く、「すべての人に偉人と呼ばれる時、もはや傀儡同然」なのである(『花なき薔薇』)。

そう考えると、本書における著者・董炳月氏の研究姿勢は貴重なものと言える。魯迅の影響を強く受けてきた著者は、「影の中の人」と自認しながらも、魯迅をめぐる言説に存在する歪みや盲点を冷静に捉え、自分にとって巨大な存在であるはずの魯迅の「形」、即ち本来の姿の復元に努めたのである。「正編」前半の七つの論考が、そのような魯迅の「本体」及びその「形成のプロセス」を探究した部分にあたる。著者は魯迅の日本留学経験を中心に史料を掘り起こし、「神話」化されることで遮られた仙台体験の背後にある複数の新事実を指摘した。留学時代の思想変化の軌跡、魯迅における「ロシア」の意味、魯迅の文明観と論吉や漱石のそれとの関係、魯迅が留学時代に築きあげた美術観など、魯迅研究において極めて重要な問題に関して、示唆に富む発見と創見を多く示した。

ここにその一例だけを示そう。「ロシア」が魯迅に与えた影響について、これまでの研究は単に文学または美学の面から考えてきたが、著者は日本留学時代の魯迅の日露戦争体験を総合的に考察した上で、「「ロシア」はまず歴史事件、思想、文学の複合体として国家／国民をめぐる思想の面で魯迅に影響を与えたのであり、ロシア文学もそのような複合体の一要素としてはじめて意味を持つのである」という観点を新たに示した。著者はまた、従来の魯迅研究が否定していたトルストイの影響を論証した。何より印象深いのは、仙台時代の魯迅の中に「国民—非国民」、「戦争—反戦」の相反する二つの傾向が存在することを著者が指摘した点である。これまで「幻灯事件」に象徴される仙台時代の日露戦争体験は、魯迅に国民意識の覚醒と強化をもたら

董炳月『魯迅形影』(生活・読書・新知三聯書店、2015年12月)

したものを目されてきたが、著者の考察によって、ポスト仙台時代の魯迅に見られたような狭隘な国民意識を超克しようとする思考も、実は仙台時代に萌していたのが明らかになったのである。

この例に限らず、本書によって描き出される魯迅の「形」は、複数の矛盾し背反するものを同時に抱え込んだ複雑な思想者の像である。留学生魯迅の等身大の「形」を「神話」の呪縛から解放し、「個」の価値を何より重んじた思想者の姿を、その一連の葛藤、彷徨とともに描出することによって、「もがき(掙扎)」ながらも始終真摯な態度で生を貫いた「一個人」としての魯迅の価値が改めて見えてくるのである。

また、「正編」後半の三つの論考及び「副編」六編において、著者は「影」の部分に目を転じる。そのうち、「正編」の三篇は日本に関するものであり、それぞれ霜川遠志、新島淳良、井上ひさしを通して、戦後の日本における魯迅の受容、解釈及びその思想の実践を考察している。これまで戦後の日本における、学术界以外での魯迅受容という問題は、井上ひさしに関する極一部の研究を除いてはほとんど触れられておらず、霜川遠志、新島淳良に関しては、本書の論考が最初となるのではないと思われる。その意味で、本書によって魯迅研究の射程は大きく広げられたと言える。

後半部分も興味深いところが多く枚挙にいとまがないが、個人的に特に印象深かったのは、霜川遠志の作品に代表された日本の民間による大胆な魯迅像に対する、著者の受け止め方である。日本の民間の創作によって魯迅の「暴力」的な面と「女性関係」が虚構として創出されたのに対して、著者は「冒涇」と感じたこともあると明かしながらも、それは「同時代の中国」とも「日本国内の学術の場」とも異なる「もう一つの空間」における魯迅像だという認識を示し、その「でたらめに近い虚構によって、意外と魯迅の内面における本質的で、グレイゾーンのような真実に接近できた」と評価したのである。

このように本書において著者は、日本との関係を重要な手がかりとして、魯迅の「形」を様々な角度から追い求め、その「影」の中からも真の「形」に接近する手段となりうる要素を見出した。そして、本書も著者の「形影」の定義に従えば、魯迅の「影」の中に加わっていくこととなるのであろう。おそらく「形影相舞う」こそ本当の意味での生産的な魯迅研究だと言えよう。